



地域おこし協力隊
2013
|
2016



三好市地域おこし協力隊第2期生として観光課に配属された2013年からの3年間は、三好市の魅力を市内外に発信してきました。
ときにはみずから体を張って体験することも…



山暮らしの知恵と技
山の暮らし



地域おこし協力隊在任中には、培ってきたイラストとデザインの能力を活かして、フリーペーパーを製作。繊細でありながら柔らかなタッチのイラストは、見た人を驚かせた。

親子での米づくり体験などを企画して農業体験をしたり、薬草を植える畑を探したり、農業への熱い思いと持ち前の明るい笑顔でどんどん地域に溶け込んで行きました。

「朝起きると、玄関に野菜が置かれていた」という他の自治体の地域おこし協力隊の話聞いて「それぞれ！そういうのに憧れてた！」と思ったそうです。
親子での米づくり体験などを企画して農業体験をしたり、薬草を植える畑を探したり、農業への熱い思いと持ち前の明るい笑顔でどんどん地域に溶け込んで行きました。



特集

ここがわたしの生きるまち

地域おこし協力隊として8年前の2013年、三好市にやってきた和田佳さん。3年間の隊員期間を満了した後も三好市に住み続け、2017年、「さかなやデザイン」を起業しました。「さかなやデザイン」を起業して三好市でどっかりと根を下ろし、20歳の時から思い描いていた田舎暮らしを楽しみながら実現した和田さん夫婦をご紹介します。

学生時代に会った
自然と触れ合うという生き方

「学生の時に、『半農半X』という生き方／著者…塩見直紀さん』を読んで以来、ずっと田舎暮らしを実現したいと思ってきました」と、和田佳さんはいつものように笑います。「半農半X」とは、その名の通り、半分農業、半分別の仕事を持つ生き方のこと。由佳さんは現在、夫婦で「さかなやデザイン」というイラストレーションとデザインの会社を営み、自分たちが食べる野菜を作ったり、薪で沸かしたお風呂を楽しむライフスタイルを三好市で楽しんでいます。

もしかしたら、和田さん、という呼び方より「肴倉さん」「さかなちゃん」の方がしっくりくるかもしれません。2年前に埼玉県出身で、元高知県東洋町地域おこし協力隊の和田直樹さんと結婚しました。それぞれの得意を生かし、仕事もプライベートもサポートし合っご夫婦です。

東京から三好市へ
移住生活が始まった

由佳さんは神戸市出身で、2013年、今から8年前に三好市地域おこし協力隊として東京から移住してきました。由佳さんから見た四国は、東京から程よく距離があり違う文化を持つ地域。「その当時、田舎暮らしといえば信州。でも信州では、ちょうどいいところが見つかりませんでした。」

移住してきたばかりの頃は池田町の中心部に居を構え、協力隊活動に取り組んでいました。でも、スーパーもコンビニも徒歩5分以内、東京とあまり変わらず便利で期待はずれだったと言います。

「朝起きると、玄関に野菜が置かれていた」という他の自治体の地域おこし協力隊の話聞いて「それぞれ！そういうのに憧れてた！」と思ったそうです。



阿波池田郵便局内にて
原画レプリカ展示しています

年賀状を見て故郷を
思い出し、大歩危を
見たいと思って
もらいたいな



2022年の年賀はがき徳島地方版に由佳さんの描いた、「大歩危峡と観光列車」が選ばれました。来年の年賀はがきは是非コレで。

その発売を記念し、11月12日、大歩危駅で、題材にもなった観光列車「四国まんなか千年ものがたり」を前に、日本郵便株式会社の安達四国支社長から、由佳さんと四国旅客鉄道株式会社の半井会長に、原画のレプリカと年賀はがきの贈呈式が行われました。



去年は上手くいかなかった大根作り
今年は立派なのができた



近所の小山さんが引越祝いにと
プレゼントしてくれた看板

大学院では日本画専攻へ 絵を描くことは目的じゃない

2016年、協力隊期間を満了し、そのまま住み続けることに決めたのは、田舎暮らしに憧れてきた由佳さんにとっては自然なことでした。

貸し農園で野菜を作ったり登山を楽しむ両親の影響もあり、自然への思いを温めていた学生時代、芸術研究科には絵が描きたくて進学してきた学生がほとんどでした。でも由佳さんの目的

は「半X」づくり。つまり将来の田舎暮らしを実現するために、絵を描くことを学んだのです。

少しでも自然に触れたい だから、東京へ

大学院卒業後、関西でデザインの仕事をする毎日。自然と触れ合えるのは程遠く忙しい日々が続きました。30才になった頃、「このままでは憧れてきたライフスタイルを実現できない」とついに動きました。

転職した先は東京の「日本野

鳥の会」でした。「野鳥の会なら自然に少しでも関係する仕事ができるかも」。しかし配属先は広報で、野鳥の絵を描く機会すらありません。大都会でせわしなく働く日々が続きました。

きっかけは偶然だった 人生を変えた2つの出会い

そんな毎日が2年ほど続き、ある日、行政が都会から田舎に移住することを支援していることを知りました。その時は、大きな移住相談会が終わってしまっ

た後で残念に思っていました。

東京で三好市単独の移住相談会があると知り、「三好市のことは何も知らなかったけど行ってみよう」。それが三好市との出会いとなりました。実は夫の直樹さんとの出会いもこの相談会の日

でした。神戸市出身の由佳さん、相談を受けた三好市職員の話す言葉のイントネーションが暖かく感じたそう。両親が青森県出身で、「移住するなら東日本かな」とイメージしていた由佳さんの中に、三好市が浮上することに なりました。そして地域おこし協力隊として、やっと田舎暮らしを実現する機会が訪れました。

ひと、しごと。つながりあって このまちで生きていく

2017年2月、「さかなやデザイン」は誕生しました。水彩や色鉛筆による柔らかなタッチのイラストと、若い女性や子供向けのパンフレットなどが得意なデザインの会社です。観光列車が走る三好市では鉄道の仕事も増えてきているそう。

「ここでは仕事と私生活が近く感

じます。仕事をくれた人から野菜ももらったり(笑)。それは、人と人とのつながりを大切にできた由佳さんだからこそ感じることがかもしれません。

ひとつの仕事に関わると、その題材をいろいろと調べます。パンフレット製作などは、発注してくれた人と一緒に考えて、その題材をプロデュースする仕事。調べたり考えたりしていくうちに、それがまた新しい出会いにつながってききました。

ここは、描き続けた暮らしを 実現する場所

学生時代から、ブレることなく田舎暮らしに向かってまっすぐに進んできた由佳さん。いつも絶やさない明るい笑顔の理由は、信念の強さからかもしれません。いつかは薪ストーブや米づくりも挑戦してみたい。1年間仕事がなくとも自給自足していけるかも。そんな心の安らぎを得られたのは、描き続けた夢を大切に温めてきたから。

「次はニワトリを飼う予定です。もうカゴは用意しています」。

WORKS

さかなやデザイン
2017 -



絵本やガイドブック、商品パッケージなど、手がける仕事はさまざま。取り扱う題材によって、手に取った人の姿をイメージして、水彩、色鉛筆、コンピュータなどからテイストを決めていく

- 1 三好ジオパーク構想絵本「ぼくは山」。水彩画に目、鼻などのパーツを置いて写真を撮って仕上げた
- 2 剣山のガイドブック。大好きな野鳥や花の絵は描いていて楽しい
- 3 手がけたいろいろな案件
- 4
- 5
- 6
- 7 三好市トートバッグは、元になった職員のデザインをブラッシュアップした

